

# ところ変われば、 友だちもいろいろ

ウズベキスタンで出会った友だちはいったいどんな人たちだったろう。

ほんの数考えただけでも、友だち、という単語ひとつから、

ずいぶんとたくさんの方の顔が思い浮かぶことに気がついた。

**櫻間瑞希** さくらま みずき / 筑波大学大学院人文社会科学専攻科博士後期課程

私はウズベキスタンに暮らすタタール人のことばを研究している。タタール人は、マジョリティ民族であるウズベク人と同じくテュルク系の民族で、100以上の民族が暮らすこの国のなかでは5番目に大きな規模を持つ人々である。この地に住まう民族的マイノリティの多くはソ連時代にロシア語化したと言われており、タタール人も例外ではない。しかし、独立から四半世紀が過ぎ、国内の言語政策の変化や、国外からのさまざまな思想や流行の流入とともに、人々が話す言語も変わりつつある。近年では、タタール人の若者のあいだで、忘れ去られた“民族のことば”を取り戻そうとする動きも見られるようになってきた。今まさに過渡期にある彼らのことばに興味を持ち、留学生として首都タシュケントの地を踏んだのは、2013年春のことだった。

## 知らない人の結婚式で友だち代表スピーチ

すでにウズベキスタンでの長期の滞在を終えて帰ってきた先輩方は、口を揃えて「ウズベキスタンの結婚式はすごいぞ」と言うばかりだった。いったい何がすごいのか。その具体的な意味は教えられないままタシュケントにやってきた私だったが、この地に来て早々にその意味を知ることになる。それはタシュケントの地を踏んでから5日目のことだった。少しずつ新生活にも慣れてきたので、寮母に教わったスーパーマーケットに向かって歩いていると、どこからともなく体の奥底に響き渡るような大音量の音楽が聞こえてきた。何かのイベントだろうか、と期待とともに音に向かって歩いていくと、やがて視界に入ってきた立派な建物が音の発生源だということが分かった。人混みに紛れながら、会場を覗き込もうとしたときのこと。人の輪の中にいた恰幅のいい中年男性に「どこから来た？名前は何？」と突然尋ねられた。日本から来た、と言い終わる前に男性は目を見開きながら驚き、喜び、そして神への感謝の言葉を述べたあとに、これまた近くにいた恰幅のいい中年女性たちに何やら指

示を出し始めたのだった。私が呆気にとられていたあいだに、煌びやかな装いの中年女性は私の手を引き、大音量の中心地へといざなっていく。色とりどりの服をまとった老若男女が煌びやかなホールの中心で踊り狂うなか、その向こう側に白いドレスを着た若い女性とタキシード姿の若い男性の姿を見た。そう、それは、まさに結婚式が行われている最中の会場だったのだ。やがて大音量のビートがやんでしんと静まると、司会の声が高らかにこう告げる。「今日ははるばる遠く日本からも新郎親族のお友だちがいらしています！」

友だち？と疑問に思う間もなく、私の手にはマイクが握らされていた。戸惑いとともに、私は私を席へと誘った中年女性を見つめる。すると、彼女は一言「新郎の名はアジズ、新婦の名はディヨラ」とだけ告げて、にんまりと笑みを浮かべながら、いいから何か話さない、と顎を一度突き出す仕草をする。先ほど出身地を聞かれてからここまで5分ほど。緊張も驚きも、何もかもを乗り越えた私は、驚くほど饒舌に述べた。「親愛なる友人アジズとディヨラ、親愛なる親族と友人のみなさん、日本人を代表してみなさんを祝福します」と。

ウズベキスタンの結婚式はとても規模が大きく、地域によって差異はあるものの、おおむね数日間続く。私が遭遇したのはいわゆる披露宴にあたるもので、200~300名ほどの参加があるのが一般的である。近い友人から親戚の友人の友人まで、参加者の属性はさまざまだが、式場前をたまたま通りかっただけの外国人が参加することは決して珍しいことではない。この国の人々には「遠方からの来訪者は神の遣い」といった共通の認識があり、その距離が遠ければ遠いほど良いとされているらしかった。そうした背景もあり、即席スピーチを終えた私は、これから結婚式を控えた子どもや友人をもつ人々から数えきれないほど声をかけられた。もちろん、日本という遠い東の国からきた友人を代表して結婚式に出席してもらいたい、という依頼だった。そして私は、先輩たちが「ウズベキスタンの結婚式はすごいぞ」と口々に述べた理由をうっ

結婚式に招いてくれたウズベク人の家族ファイズラホジャエフ家のみなさん。結婚のお祝いとは別に、遠方から来た私をもてなすためにわざわざ食事会を開いてくれた。(2013年3月、筆者撮影)



学生寮で同じフロアに暮らしていた男子学生たちと、寮の台所で。この夜は全員で協力してブロフを作り、まさに同じ釜の飯を食べた。(2013年5月、通りすがりの学生撮影)



カザンで調理されるブロフ。料理人の父親を持つ学生が作るブロフは寮のなかでも大人気で、週末の昼間は彼の腕が存分に振るわれた。(2013年5月、筆者撮影)

すらと理解しはじめたのであった。

## 同じ釜の飯を食った友だち

もしかすると、この国で言う友だちとは、私がこの語を聞いて想像する友だちと何か違うのかも思えない、と思い始めたのはその頃のことだった。

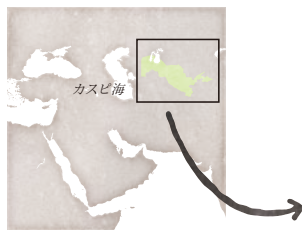
「ウズベキスタンの感覚ではどのタイミングで友だちになるの?」と、あるとき私は学生寮で同じフロアに暮らしていた男子学生たちと夕飯を食べているときに尋ねたことがある。目が合ったら、一度話したら、お互いの名前を知ったら……と、やっぱり!と思うような意見が次々と出されたなかで、もっとも印象に残っているのが「同じカザン(鍋)のプロフ(ウズベクの伝統的なピラフ)を食べたら」という回答だ。日本語にも「同じ釜の飯を食った仲」という表現があるだけに、妙な親近感を覚えるばかりだった。

その当時、さまざまな手違いから寮の男子フロアに一室をあてがわれた私は、毎晩のように男子学生たちと集まって夕飯を食べるのが習慣となっていた。伝統料理のプロフは男性が作るものと考えられているもあり、毎晩誰かしら美味しいプロフを用意してくれたが、彼らはまさに「同じカザンのプロフを食べた」友だちだった。

## 友だちから家族へ

同じカザンのプロフといえば、調査先で訪れる家庭では必ずと言っていいほどプロフを振る舞わ

自宅の自慢のかまどでタートル料理を作る友人ライラの後ろ姿。私を娘として扱う彼女は、私にとっては何でも話せるおばあちゃんのような存在だ。(2013年7月、筆者撮影)



ウズベキスタンの典型的な結婚式(披露宴)の様子。会場には常に大音量のダンス音楽が流れており、フロアでは招待客が踊りたいタイミングで踊る。(2013年4月、筆者撮影)



れたことも思い出深い。留学中の私は、時間が合えば知らない人の結婚式に友だちとして出席することもあったが(その当時の私を知る日本人の友人はレンタル日本人と私を呼んだ)、ほとんどの時間は本来の目的であるタートル人のことばの調査に

精を出していた。調査の都合で同じ家庭を何度も訪ねることは珍しくなく、普段飲んでいる紅茶の銘柄を家庭ごとに把握するまでにさほど時間はかからなかった。帰国から5年が経過した今も頻繁にやり取りがある友人の多くは、調査で出会った人々である。

「娘や、私の愛する娘や、いつでもうちに帰っておいで」と言って別れ際に私を抱きしめた彼女は、いつしか私にとっても研究協力者以上の、友だち以上の存在になっていた。70歳を目前に控えた彼女はいつもにこにこ笑っていて、スマートフォンも使いこなす元気な女性だ。出会った当初は「日本から来たお友だち」と近所の人に紹介されていたが、何度も通い、同じカザンのプロフを食べながら、お互いの本音がすらすらと口から出てくるようになったころには「私の娘」と紹介されるようになっていた。



留学中ずっとお世話になった文具屋の店主ポティルと。ウズベク語の授業のあとによく彼の店に行き、何度も会話の練習に付き合ってもらった。大切な友人のひとりだった。(2014年3月、櫻間瑛撮影)

## いつしか第二の故郷に

結婚式に私を呼んでくれた名前だけ知っている友だち、ウズベク語の授業中にいつもこっそり答えを教えてくれた友だち、同じカザンのプロフを毎晩一緒に食べた友だち、私を娘として迎えてくれた家族同然の友だち……留学中に会った友だちの顔を思い出すたびに、里心がついてしまう。あ のとき、私は確かにこの国に暮らす人々とのあたたかな繋がりのなかで生きていた。そして、ウズベキスタンという異国の地が私の第二の故郷となったのは、紛れもなく、この地で出会った素敵な友だちのおかげだった。

FP



留学中お世話になった友人家族と。当時大学院生だった友人ノモンジョンはよく議論の相手、時おり自宅に招いてごちそうしてくれた。お母さんの料理はどれも美味しかった。(2013年11月、セルフタイムで撮影)